

2013年鹿屋体育大学発オリンピック・ムーブメント —古代オリンピック競技祭復元と現代スポーツ再考—

山田理恵*, 松村勲**, 隅野美砂輝*, 松尾彰文**, 金高宏文**, 森規昭*****,
塩川勝行**, 中本浩揮*, 森克己*, 和田智仁*, 田口信教**, 北川淳一**,
瓜田吉久**, 吉田剛一郎***, 國宗久資****

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、今後ますますオリンピック・ムーブメント（オリンピックの理念を理解し、スポーツを通して人類の繁栄と世界平和をめざす活動）が浸透し、スポーツの価値が重視されると考えられる。

そのようななか、体育・スポーツ科学の教育研究を専門とする本学が担う役割はきわめて大きい。社会一般の方々も、オリンピック・ムーブメントとオリンピック教育の推進における主導的役割を本学に期待しているといえる。

そこで、鹿屋体育大学では、2013年が今日のオリンピックを創始したフランスの貴族ピエール・ド・クーベルタン（1863-1937）生誕150年にあたることを機に、オリンピックの原点とその理念を振り返ることを通して、スポーツの文化的意義への理解を深めスポーツの教育的価値を再認識することを企図し、重点プロジェクト事業経費（戦略的 I S O P 経費：事業名「クーベルタンとオリンピック—近代オリンピック創始者・クーベルタン生誕150年記念企画—」）等によって、次のような内容の事業を実施した。

- ①クーベルタンと近代オリンピックに関連する資料・情報を収集・整理し、それらの成果をもとに作成した資料を NIFS GALLERY において展示し、スポーツの価値やオリンピック

に関する情報を発信する。また、第22回冬季オリンピック競技大会（2014年2月、開催地：ソチ）についても展示を行う。

- ②オリンピックや、クーベルタンとオリンピックに関する研究者を招聘し、オリンピックの過去と現在を繋ぐイベント（古代オリンピック競技祭の競技法体験および講演会）を開催する。それらを通して、スポーツの意義と教育的価値を再考するとともに、現代社会におけるスポーツ文化の在り方について提言を行う。

- ③オリンピック教育とオリンピック・ムーブメントにおける課題を考察し、オリンピック・ムーブメントの浸透と情報発信を図る。

本稿では、これらの事業内容のなかから、「オリンピック精神とスポーツの価値—今、スポーツ界に求められるもの—」というテーマのもとで開催したイベント（2013年11月10日）の経過と成果について報告するものである。

I イベントの趣旨

スポーツが青少年教育に有効であり世界平和に繋がるという考え（オリंपイズム）をもっていたフランスの貴族ピエール・ド・クーベルタン（1863-1937）は、古代ギリシアで開催されて

* 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

** 同スポーツ・武道実践科学系

*** 同スポーツ生命科学系

**** 同財務課

***** 鳥取大学学術情報部図書館情報課（元鹿屋体育大学学術図書情報課）

いたオリンピック競技祭（古代オリンピック）の復興を提唱した。その構想は世界の国々から賛同され、1896年に第1回大会がアテネで開催されるに至った。以来戦争による中断もあったが、オリンピックは、最も大規模で華やかな国際的スポーツの祭典として人々に感動を与えてきた。

2013年が、その近代オリンピックの創始者・クーベルタンの生誕150年にあたることを機に、鹿屋体育大学では次のようなプログラムでイベントを企画した。

イベントは2部構成になっており、午前中の第1部「オリンピアンと体験しよう！古代オリンピック競技祭」は、陸上競技のオリンピアン・高平慎士氏（2008年北京オリンピック男子4×100mリレー銅メダリスト。富士通陸上競技部所属）をお迎えし、古代オリンピック競技祭の競技種目を体験するというプログラムを実施した。午後の第2部は、「オリンピアンと考える—今、スポーツ界に求められるもの—」というテーマで、①若手クーベルタン研究者・和田浩一氏（横

浜フェリス女学院大学准教授）による講演、②為末大氏（400mハードル。オリンピック3大会出場、世界陸上競技選手権大会2大会銅メダリスト、日本選手権5連覇。（一社）アスリートソサエティ代表理事）と、午前中に引き続いての登場となる高平選手によるトークショー形式での講演会、というプログラムであった（資料1参照）。

本イベントを通して、オリンピックの原点を振り返りながらスポーツ文化への理解を深めるとともに、暴力や虐待、ドーピングなど倫理的な問題が暗い影を落としている今日の日本のスポーツ界に今何が求められているのか、フェアなスポーツ界をめざしてどのような提言をすることができるのかを、オリンピアンの方々と、そして参加者の方々と一緒に考えるという1日であった。

Ⅱ 第1部 古代オリンピック競技祭種目体験「オリンピアンと体験しよう！古代オリンピック競技祭」の経過と概要

古代ギリシア人は、身体を鍛えることにととても強い関心をもっていた。身体を鍛えることは、一般市民の教養でもあったのである。そのような古代ギリシアでは、陸上競技的種目を中心とした、大規模な運動競技の祭典が四つ開催されており、その一つが、今日のオリンピックのモデルとなった古代オリンピック競技祭である。4年に一度開催されるこの競技祭では、出場者は、競技者としての名誉をかけて闘った。

第1部では、オリンピアン・高平慎士選手とともに、その古代ギリシアの古代オリンピック競技祭の種目のなかから、スタディオン走と錘をもった立幅跳を体験し、古代ギリシア人になったつもりで、安全に気をつけながら、古代ギリシア人の競技にかける思いを体感するというプログラムであった。

当日は、朝から大粒の雨と強い風のため、第1部の会場を、当初予定していた陸上競技場から総合体育館主体育室に変更した。

近代オリンピック創始者・
クーベルタン生誕150年記念イベント

オリンピック精神とスポーツの価値
— 今、スポーツ界に求められるもの —

会場：鹿屋体育大学
日時：11月10日(日)
第1部 9:30-12:00(陸上競技場)
第2部 13:30-16:00(水野講堂)

第1部 古代オリンピック競技体験(陸上競技場) オリンピアン：高平慎士氏
「オリンピアンと体験しよう！古代オリンピック競技祭」 ①懸線走 ②おもりを持って行う立幅跳び
参加者40名。往復バスでの事前申し込みが必要です。10月28日(月)必着

第2部 講演会(水野講堂) オリンピアン：為末大氏、高平慎士氏 (400名)
「オリンピアンと考える—今、スポーツ界に求められるもの、求められるもの—」

※第2部の参加については、事前申し込みは不要です。

後援：NPO法人 日本オリンピック・アカデミー 鹿児島県 鹿児島県教育委員会 鹿屋市 鹿屋市教育委員会
筑波大学オリンピック教育プラットフォーム (公財)鹿屋体育大学体育・スポーツ振興教育財団 NPO法人 NIFS スポーツクラブ

申込み先：〒891-2993 鹿屋市白水町1番地
鹿屋体育大学 クーベルタン生誕150年記念イベント運営委員会事務局
問合せ先：山田研究室 0994-46-4973 森研究室 0994-46-4956

資料1 イベント・ポスター

9時開始予定であったが、荒天による会場変更を考慮して、開始を10分遅らせ、9時10分開会となった。この第1部のプログラムには、地元鹿屋市の小・中学生を中心に42名が参加し、陸上競技部を中心に学生スタッフが運営補助を務めた。写真1（以下、写真は山田撮影による）は、古代ギリシア人になったつもりでポーズをとる陸上競技部の学生たちである。彼らが着用している白い衣服は、古代ギリシア人の衣服・キトンを模して製作したもので、高平氏も身に付けて開会式に登場した。古代オリンピック競技祭では裸体競技であったが、本イベントでは、製作するにあたり、ネメアの地でオリンピック開催年に復元されるネメア競技祭（オリンピック競技祭とともに古代ギリシアで開催されていた四大競技祭の一つ）参加者の写



写真1 古代ギリシア人が競技を行っているポーズで

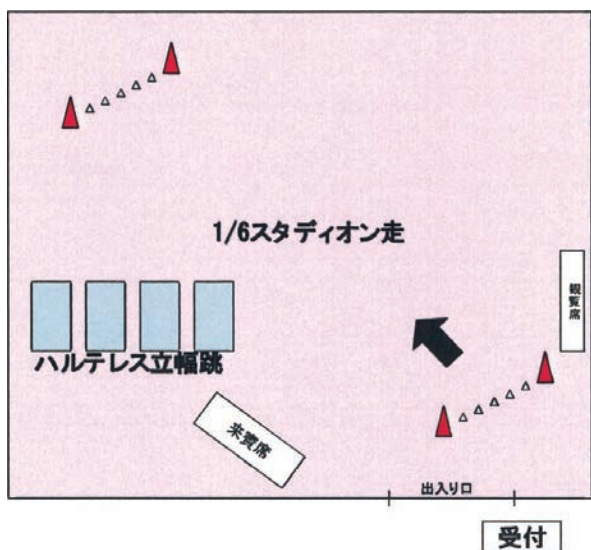


図1. 古代式競技種目体験実施図

真（真田氏撮影）を参考資料とした。

本学教員・塩川による総合司会のもと、まず、福永哲夫学長の開催挨拶、本学教員・山田による開催趣旨説明、筑波大学体育専門学群長の真田久氏による古代オリンピック競技とその競技法についての説明がなされた後、古代式競技種目体験がスタートした。体験種目としては、古代オリンピック競技祭で行われていたスタディオン走（約192.27mの直線走）とハルテレスという錘を持って行う古代式立幅跳の2種目で、図1は、その実施図である。

参加者の年齢も考慮して、スタディオン走は、約1/6の距離（約33m）とし、ハルテレスは、小・中学生では、1.0-1.6kgのウォーターダンベル（ダイソー社製）、高校生以上では2.0-3.0kgのラバーコーティングダンベル（NISHI社製）を両手に各1個用いることとした。本学教員・金高、松村および陸上競技部学生らスタッフの洗練された運営能力が発揮され、プログラムは円滑に進行した。

1/6スタディオン走では、はじめに、オリンピック・高平選手によるデモンストレーションが行われた。スタディオン走は、スタート方法が独特である。それは、公正を期するためにスタートライン上に腰の位置にロープを張り、それが地面に落ちると同時にスタートするという方法である。参加者もはじめはこのスタートに戸惑っていたものの、2回、3回と行ううちに手馴れてきたように見受けられた（写真2参照）。



写真2 スタディオン走のスタート法(右から3番目が高平選手)

最後に世代, 性別で組分けをし, レースを実施した。各組1着だった参加者には, オリーブの葉冠(レプリカ)が贈られた。高平選手は, 毎レース中央コースに登場, スタートした時点ですでに差をつけている高平選手の走りに, 会場中から大歓声と拍手が沸き起こった。本学陸上競技部短距離の学生たちにとっても, オリンピアンの走りに間近で触れることができ, 貴重な体験となった。

続いて, ハルテレスを持って行う古代式立幅跳体験に移った。天候により屋内での実施になったため, マットを数枚重ねて, 安全面に最大限の注意を払った。

まず, 参加者のひとりで, 筑波大学附属中学校等で古代式競技法を指導している宮崎明世氏(筑波大学准教授)が, 錘を持っての跳び方を披露した。その後, 世代別に分かれて, 実際に錘をもつての立幅跳体験を行った。初めのうちは, 着地前に錘を後方に手離すことが難しく, 錘を持ったまま着地する姿が多く見られたが, 練習を重ねるにつれ, 器用に手離す参加者が増えていた。

さらに, 参加者は, 錘有り(現代の競技法)と錘無し(現代の競技法)で立幅跳を実施し記録を取り, 両者の違いを確認した。その結果, 半数以上の参加者で, 錘有りの場合がより遠くに跳べた結果となった。

ところで, 2002年のNatureには, Minetti and Ardigóによる, ハルテレスの重さと幅跳の記録との関係について分析した興味深い論文が掲載されている。同論文は, 次のように要約される(翻訳協力: 本学学生 黒原尚武)

「ハルテレスは, 紀元前708年, 第18回古代オリンピックの立幅跳競技で初めて使用された手に持つ錘である。ハルテレスは, 競技をより難しくするため, あるいは, より遠くに跳ぶために導入したとされる。ハルテレスは石や鉛から作られ, 重さは2-9kgである。当時の跳躍は, 踏み切り前にハルテレスを前後に振り, 踏切直後にハルテレスを前方に出し, 着地直前に後方に振っていた。

同一の踏切速度, 踏切角で跳躍した場合,

錘を持った方が, より遠くに跳躍できる。これは, 身体重心の放物線軌道が同一と仮定すると, ハルテレス(右3kg+左3kgの場合)を持つことにより, 身体重心の位置が移動するため, 跳躍距離は0.1m増加する。さらに, 身体重心の放物線軌道は下方向に変化し, 水平方向に0.07m長くなる。全体として, 跳躍距離は0.17m増えることになる。着地直前にハルテレスを後方に投げるとさらに跳躍距離が増加すると考えられる。

コンピュータで0-20kgの錘をつけた垂直跳をシミュレーションした。その結果, 約6kgのハルテレスをつけたとき踏切速度は2%向上し, 全体のパフォーマンスは錘が10-12kgを超えると低下した。

次に, 実際に4人の被験者に垂直跳を行わせ, 錘と踏切速度や最高到達点との関係を検証した。パワーの最大値に関する測定結果は, ハルテレスの重さが2-9kgの範囲(5-9kgが最適)のとき, パフォーマンスは5-7%向上するが, 錘が10-12kgを超えるとパフォーマンスへの効果は失われる。

錘をつけたことによるパフォーマンスの向上は, ハルテレスの位置によって身体重心の位置が変化したこと, および上肢に加わった錘をうまく利用することでより大きな地面反力を得たことによる。

シミュレーションの予測(2%の向上)と実試技(5-7%の向上)との違いは, 体内にある弾性構造体(腱と靭帯)が原因と考えられる。すなわち, 弾性構造体が, より大きな地面反力によってより多くの弾性エネルギーを蓄えることができるからである。

跳躍距離を向上させるのに最適な錘(約2-9kg)は, 古代ギリシアのハルテレスの重さにほぼ一致していた。これは, 古代ギリシアのアスリートたちが自分たちにとって最適なハルテレスを利用していたことを示している。」(Minetti and Ardigó, 2002)

古代ギリシアの競技法を科学的に理解するために、すでに本論文を翻訳・作図し、パネル資料を作成して NIFS GALLERY において展示していたが、第1部のイベント会場にも展示し、競技解説の際にも活用した(資料2)。古代ギリシアの競技種目を体験するとともに、科学的な見地からもアプローチするという点が、スポーツ科学の教育・研究を専門とする本学のイベントの特色でもあるといえる。

高平選手も、錘を持った立幅跳を体験した。錘の有無にかかわらず、その跳躍力に会場が沸いた(写真3)。参加者も運営スタッフも、改めてオリンピックの高い身体能力に感動した。

参加者一人ひとりに、錘有りとなしそれぞれの記録を記した「記録証」が手渡された。前述のように、参加者の半数以上が、錘を持って行ったほうが、持たない場合よりも記録が良かったという結果となった。高平選手もまた、錘を持ったことによって記録が伸びた一人であった。

憧れのオリンピックと一緒に競技を体験できるとあって、参加した小中学生らはもとより高齢者

の方々、本学の学生スタッフも運営に携わった教職員も、興奮気味に古代の競技を楽しんだ。真田氏と高平選手から講評(写真4)が述べられた後、参加者の記念撮影が行われた(写真5：オリンピックと参加者、学長の記念撮影)。高平選手からは、「子どもたちから高齢者の方々まで、さまざまな世代の人たちが一緒に競技を楽しむというイベントに参加したのは初めて」ということで、「このような機会があったら、また参加したいです。」という感想が述べられた。またキトンについても、「参加者全員が、これを着て参加できたら良かったですね。」とのコメントがあった。

なお、今回のイベントでは、運営スタッフとし



写真3 錘(ハルテレス)を持った古代式立幅跳びを体験する高平選手



写真4 高平選手による第1分の講評を熱心に聴く参加者たち



写真5 高平選手を囲んで記念撮影

古代オリンピックの跳躍競技で使用されたハルテレス(Halteres)
—古代ギリシアのアスリートたちは、自分たちにとって最適なハルテレスを利用して—

(要約)
ハルテレスは、紀元前708年、第18回古代オリンピックの立幅跳びで初めて使用された。手に持つ錘である。ハルテレスは、競技をより難くするため、あるいは、より速く跳ぶために導入された。ハルテレスは石や鉛で作られ、重さは2~9kgである。当時の跳躍は、踏み切り前にハルテレスを前後に振り、踏切直後にハルテレスを前方に出し、着地直前に後方に振っていた(図1・上段)。

図1. 立幅跳におけるハルテレスの使用
上段: 空中と着地直前におけるハルテレスを用いた跳躍が描かれた壁絵
下段: 異なる材質(石や鉛)、形状、重さ(1.1~4.5kg)の古代ギリシアのハルテレス。

同一の踏切速度、踏切角で跳躍した場合、錘を持った方が、より速く跳躍できる。これは、身体重心の放物線軌道が同一と仮定すると、ハルテレス(右3kg+左3kgの場合)を持つことにより、身体重心の位置が移動するため、跳躍距離は0.1m増加する。さらに、身体重心の放物線軌道は下方に変化し、水平方向に0.07m長くなる。全体として、跳躍距離は0.17m増えることになる。着地直前にハルテレスを後方に投げるとさらに跳躍距離が増加すると考えられる。コンピュータで0~20kgの錘をつけたとき踏切速度は2%向上し、全体のパフォーマンスは錘が10~12kgを超えると低下した。

図2. 錘の重さと踏切速度や最高到達点との関係
錘を持たない跳躍を100%として、パーセント表示。図中の網掛け部分は、古代ギリシアのハルテレスの重さの範囲である。

次に、実際に4人の被験者に垂直跳を行わせ、錘と踏切速度や最高到達点との関係を検証した(図2)。パワーの最大値に関する測定結果は、ハルテレスの重さが2~9kgの範囲(5~9kgが最適)のとき、パフォーマンスは5~7%向上するが、錘が10~12kgを超えるとパフォーマンスへの効果は失われる。

錘をつけたことによるパフォーマンスの向上は、ハルテレスの位置によって身体重心の位置が変化したこと、および上肢に加わった錘をうまく利用することでより大きな地面反力を得たことによる。

シミュレーションの予測(2%の向上)と実技(5~7%の向上)の違いは、体内にある弾性構造体(腱と筋)が原因と考えられる。すなわち、弾性構造体が、より大きな地面反力によってより多く弾性エネルギーを蓄えることができるからである。跳躍距離を向上させるのに最適な錘(約2-9kg)は、古代ギリシアのハルテレスの重さにはほぼ一致していた(図1下段)。これは、古代ギリシアのアスリートたちが自分たちにとって最適なハルテレスを利用していたことを示している。

【文献】
Minetti, A.E. and Ardigo, L.P. Halteres used in ancient Olympic long jump. NATURE, VOL. 420: 141-142, 2002. (図1および図2は、http://www.nature.com/nature/journal/v420/n6912/fig_tab/420141a_ft.htmlより引用。参照日2013年8月19日)

(翻訳協力 体育学部スポーツ総合課程1年 黒原尚武) 本論文を基に本学にて作成

資料2 ハルテレスに関する研究論文の紹介

て参加した陸上競技部をはじめとする学生たちの大会運営・マネジメント能力が、学内外の多くの参加者から評価された。学生のひとは、同イベントを紹介した新聞記事（2014年1月25日付南日本新聞朝刊, The Campus Press, 合庭晃一署名記事）のなかで、「それぞれの立場から専門性を生かして運営に参加していたのが印象的だった。小規模大学ならではの特性だろう。」と述べて、陸上競技専門の学生をはじめイベントスタッフの活躍を特筆している。

Ⅲ 第2部 講演会「オリンピックと考える—今、スポーツ界に求めるもの、求められるもの—」の経過と概要

水野講堂に会場を移して開催された第2部は、クーベルタンがオリンピックに込めた思いを振り返るとともに、オリンピックの体験を通して、これからのスポーツ界の在り方について考察するというプログラムであった。オリンピックの講演のあとには、ディスカッションの時間も設け、第1部からの参加者も含め約200名の聴衆が、オリンピックとしての体験に基づいた説得力有る語りに深い感銘を受けた。

第2部の総合司会は、塩川・森（克）が担当し、冒頭では、川西正志副学長から、第2部の趣旨と講師の方々の紹介が行われた。

講演1では、和田氏（前出）によって、クーベルタンの人物像と、オリンピックを創始した背景、彼が理想としたものについて、スライドを用いてわかりやすい解説がなされ、好評を博した（写真6）。

講演2では、オリンピックとして活躍中の為末氏と高平選手によるトーク形式の講演会が展開された（写真7）。司会は、本学教員の松尾・中本が担当、フロアコーディネーターを本学教員の田口信教（1972年ミュンヘン・オリンピック200m平泳ぎ金メダリスト）・金高・山田が担当した。



写真6 和田氏による講演風景



写真7 会場からの質疑に答える両オリンピック

このセッションは、「今日のスポーツ界に求められるもの」を考えるきっかけとして、「オリンピックが得たもの」についての、両オリンピックによるトークから始まった。

高平選手のトークには、「オリンピックによってもたらされる夢や感動を、これからの若者にも創って行ってほしい」というメッセージが込められていた。

為末氏は、スライドを使いながら「生きているということは、流れ続けること、変わり続けること」「意識的な自分と無意識の自分」「頭と心と体」「ドーピングはなぜよくないのか」などについて、自らの経験を中心に、先人の言葉も例にあげながら語った。ドーピングについては、スポーツ選手のプライドとして自らの努力で闘うことの崇高さを述べていたところが特に印象的であった。

トークの後、会場からの質問に答えて、両オリンピックから、アスリートをめざす若者たちにさまざまな角度からのメッセージが贈られた。

「練習」とは、「アスリート」とは、そして「勝つ」こととは何か？

オリンピックをはじめ国際大会では、日本選手だけでなく海外の選手とも仲間意識を持てたこと、アスリートは国際感覚を持つことが重要であることなどが、具体例をあげながら語られた。また、オリンピックの夢が次第に手に届きそうになり、リアリティが増していったことや、失敗したときにはポジティブにとらえていくことで乗り越えられたことなど、オリンピックならではの体験談が聴衆を魅了した。

閉会式では、本学・松下副学長の閉会の挨拶が述べられた。このイベントで学んだことが、参加者一人ひとりの今後の活動に役立つことを祈念し、講師3名への盛大な拍手とともに、イベントのすべてのプログラムが終了した。

なお、この講演会については、後日学生のひとりが、「トップアスリートであると同時に、まるで哲学者のような雰囲気と語るスポーツ界の課題と提言に説得力があった。会場からは両オリンピックへの質問が相次ぎ、充実した講演会となった。イベント参加者にとってはオリンピック、そしてスポーツの価値を見つめ直すきっかけになったと感じた。」と新聞紙上で紹介している（2014年1月25日付南日本新聞朝刊、The Campus Press、合庭晃一署名記事）

Ⅳ イベント参加者へのアンケート結果について

(1) 第1部のアンケート

第1部イベントの参加者に対し、参加者の属性およびイベントの満足度、日本のスポーツ界やオリンピック東京開催の意味に対する意見についてのアンケートを実施した。参加者のうち25名から回答が得られた（表中の合計人数に違いがあるのは、欠損または分類不能の回答を削除したことによる）。

まず参加者の属性についてみると、性別で

表1 性別

	n	%
女性	13	52.0
男性	12	48.0
合計	25	100.0

表2 年齢

	n	%
10歳代	16	64.0
20歳代	1	4.0
30歳代	4	16.0
40歳代	1	4.0
50歳代	1	4.0
60歳代	2	8.0
合計	25	100.0

表3 職業

	n	%
学生	17	68.0
公務員	2	8.0
無職	2	8.0
その他	4	16.0
合計	25	100.0

表4 住所

	n	%
鹿屋市	14	63.6
垂水市	2	9.1
錦江町	2	9.1
東京都	2	9.1
鹿児島市	1	4.5
霧島市	1	4.5
合計	22	100.0

表5 イベント参加の動機（複数回答）

	n	%
興味	13	54.2
教養のため	10	41.7
仕事のため	1	4.2
その他	2	8.3
合計	26	108.3

24名が回答

表6 イベント開催の認知経路（複数回答）

	n	%
知り合い	21	84.0
ホームページ	2	8.0
新聞	0	0.0
チラシやポスター	0	0.0
その他	2	8.0
合計	25	100.0

25名が回答

は女性が13名 (52.0%), 男性が12名 (48.0%) であった (表1)。年齢では10歳代が16名 (64.0%) と最も多く, 続いて30歳代が4名 (16.0%) であった (表2)。職業では学生が17名で68.0%と最も多かった (表3)。住所は鹿屋市が14名 (63.6%), 鹿児島県内では垂水市と錦江町が2名ずつ, 鹿児島市と霧島市が1名ずつであった。また, 東京都からの参加も2名みられた (表4)。

イベント参加の動機について複数回答でたずねたところ, 「興味」が13名 (54.2%) と最も多く, 次いで「教養のため」が10名 (41.7%) と続いていた (表5)。次にイベント開催の認知経路について複数回答でたずねたところ, 「知り合い」が21名 (84.0%) と最も多くなっており, 「ホームページ」は2名 (8.0%), 「新聞」「チラシやポスター」は0名であった (表6)。

次に, イベントのプログラムに対する満足度について報告する。

それぞれのプログラムに対して「5. 満足」から「1. 不満足」の5段階尺度を用いて満足度を測定した。まず講義の「古代オリンピック競技祭のプログラムと競技法」に対する満足度に関しては, 「5. 満足」と答えた参加者が19名 (76.0%) となっており, 次いで「4. やや満足」が6名 (24.0%) であった。「3. どちらでもない」「2. やや不満足」「1. 不満足」と答えた参加者は0名であった (表7)。満足・不満足だった点を自由記述でたずねたところ7名 (28.0%) から回答があった。その内容としては, 「古代ギリシアの競技を体験できたことが良かった, 楽しかった, 勉強になった」というものが5名, 「オリンピック選手と会えたこと」が1名であった。また「スタディオンのスタートをさらに詳しく体験したかった」という要望が1名みられた。もうひとつのプログラムである「古代式オリンピック競技種目体験」に対する満足度に関しては, 「5. 満足」と答えた参加者が20名 (80.0%) となっており, 次いで「4. やや満足」が4名 (16.0%) であった。「3. どちらでもない」「1. 不満足」と答えた参加者は0名で

表7 講義「古代オリンピック競技祭のプログラムと競技法」に対する満足度

	n	%	累積%
5. 満足	19	76.0	76.0
4. やや満足	6	24.0	100.0
3. どちらでもない	0	0.0	100.0
2. やや不満足	0	0.0	100.0
1. 不満足	0	0.0	100.0
合計	25	100.0	100.0

表8 「古代式オリンピック競技種目体験」に対する満足度

	n	%	累積%
5. 満足	20	80.0	80.0
4. やや満足	4	16.0	96.0
3. どちらでもない	0	0.0	96.0
2. やや不満足	1	4.0	100.0
1. 不満足	0	0.0	100.0
合計	25	100.0	100.0

あったが, 「2. やや不満足」と答えた参加者が1名 (4.0%) みられた (表8)。こちらも満足・不満足だった点を自由記述でたずねたところ6名 (24.0%) から回答があった。まず満足した内容は, 「今と違う競技ができて, 楽しかった」「高平さんと走れて面白かった」「新たな発見があった」という4件であった。一方不満足だった点としては, 「雨のため」「みんなの前で名前を言うところが恥ずかしかった」という2件がみられた。アンケート結果から, 第1部イベントのプログラムに対して, ほとんどの参加者が高い満足を得ていたことがうかがえる。

現在の日本のスポーツ界についての意見を自由記述でたずねたところ, 18名 (72.0%) から回答があった。意見の内容は多岐にわたっていたが, 状況に対する評価として「良い」という内容の意見が最も多く10件みられた。その具体的内容としては「世界で活躍している方々が増えていること」「どのスポーツもレベルアップしている」「子どもたちが希望を持っている」などがみられた。一方, 問題点や要望に関する回答は7件みられ, そのうち最も多かったものは「トップアスリートがもっと幅広く出ると良い」「野球やサッカーに人気集中している」「強い選手ばかりが目目されている」「メダル数以外に注目してほしい」な

どという、スポーツの見方や捉えられ方の偏りに対する問題点や要望に関する意見が5件みられた。

次に2020年の東京オリンピック開催の意味についての意見を自由記述でたずねたところ、17名(68.0%)から回答があった。これらの回答の内容も多岐にわたっているが、肯定的な意義を回答したものがほとんどで17件であった。内容として主なものは、「人々を笑顔にさせる、楽しませる」「日本の活性化」「子どもたちに夢を持たせる」などが9件と最も多く、次いで「スポーツ人口が増えるきっかけとなればよい」「オリンピック・ムーブメントやスポーツを通じた教育の理解が深まる絶好の機会」という意見が2件、「東京の良さが世界に広まる」などが2件、「震災の復興」が1名であった。また1名のみであったが、「経済効果は高いが、税金があがりそう。治安が不安」というマイナス面を心配する意見もみられた。

(2) 第2部のアンケート

第2部イベントの参加者に対しても、参加者の属性およびイベントの満足度、日本のスポーツ界やオリンピック東京開催の意味に対する意見についてのアンケートを実施した。第2部イベントでのアンケートでは、オリンピック・ムーブメントに関する質問も行った。参加者のうち114名から回答が得られた(表中の合計人数に違いがあるのは、欠損または分類不能の回答を削除したことによる)。

その内訳は、性別では女性が43名(37.7%)、男性が71名(62.3%)であった(表9)。年齢では20歳代が49名(43.4%)と最も多く、続いて10歳代が39名(34.5%)であった(表10)。職業では学生が84名で75.0%と最も多かった(表11)。住所は鹿屋市が97名(90.7%)と参加者のほとんどを占めていた。鹿児島県内では垂水市が3名(2.8%)、錦江町が2名(1.9%)、鹿児島霧島市と肝付町が1名(0.9%)ずつであった。また県外として東京都からが2名、茨城県守谷市からの参加

表9 性別

	n	%
女性	43	37.7
男性	71	62.3
合計	114	100.0

表10 年齢

	n	%
10歳代	39	34.5
20歳代	49	43.4
30歳代	8	7.1
40歳代	7	6.2
50歳代	6	5.3
60歳代	4	3.5
合計	113	100.0

表11 職業

	n	%
学生	84	75.0
公務員	8	7.1
無職	4	3.6
その他	16	14.3
合計	112	100.0

表12 住所

	n	%
鹿屋市	97	90.7
垂水市	3	2.8
錦江町	2	1.9
東京都	2	1.9
霧島市	1	0.9
肝付町	1	0.9
守谷市	1	0.9
合計	107	100.0

表13 イベント参加の動機(複数回答)

	n	%
興味	71	64.5
教養のため	41	37.3
仕事のため	6	5.5
その他	6	5.5
合計	124	112.7

110名が回答

表14 イベント開催の認知経路(複数回答)

	n	%
知り合い	54	49.5
チラシやポスター	36	33.0
ホームページ	6	5.5
新聞	4	3.7
その他	12	11.0
合計	112	102.8

109名が回答

が1名みられた(表12)。

イベント参加の動機について複数回答でたずねたところ、「興味」が71名(64.5%)と最も多く、次いで「教養のため」が41名(37.3%)と続いていた(表13)。次にイベント開催の認知経路について複数回答でたずねたところ、「知り合い」が54名(49.5%)と最も多く、次いで「チラシやポスター」が36名(33.0%)と続いていた(表14)。

次に、イベントのプログラムに対する満足度について報告する。

それぞれのプログラムに対して「5. 満足」から「1. 不満足」の5段階尺度を用いて満足度を測定した。まず講演1「クーベルタンがオリンピックに求めたもの」に対する満足度に関しては、「5. 満足」と答えた参加者が41名(38.0%)、「4. やや満足」が42名(38.9%)であった。また「3. どちらでもない」は22名(20.4%)、「2. やや不満足」は3名(2.8%)であった。「1. 不満足」と答えた参加者は0名であった(表15)。満足・不満足だった点を自由記述でたずねたところ25名(21.9%)から回答があった。その内容としては、「わかりやすかった, 理解しやすかった」というものが12件、「映像や写真が良かった」が6件みられた。逆に「わかりにくかった・難しかった」という回答も3件見受けられた。もうひとつのプログラムである講演2「オリンピックと私—フェアなスポーツ界をめざして—」に対する満足度に関しては、「5. 満足」と答えた参加者が73名(67.0%)、「4. やや満足」が26名(23.9%)であった。また「3. どちらでもない」は7名(6.4%)、「2. やや不満足」は3名(2.8%)であった。「1. 不満足」と答えた参加者は0名であった(表16)。満足・不満足だった点を自由記述でたずねたところ27名(23.7%)から回答があった。その内容としては、「五輪選手の貴重な話であった」というものが9件、「興味深く良かった, わかりやすかった」という評価が11件みられた。一方、進行や質問時間等に関する不満な意見もわずかではあるが4件みられた。

以上のとおり、アンケート結果を全体的にみる

表15 講演1「クーベルタンがオリンピックに求めたもの」に対する満足度

	n	%	累積%
5. 満足	41	38.0	38.0
4. やや満足	42	38.9	76.9
3. どちらでもない	22	20.4	97.2
2. やや不満足	3	2.8	100.0
1. 不満足	0	0.0	100.0
合計	108	100.0	100.0

表16 講演2「オリンピックと私—フェアなスポーツ界をめざして—」に対する満足度

	n	%	累積%
5. 満足	73	67.0	67.0
4. やや満足	26	23.9	90.8
3. どちらでもない	7	6.4	97.2
2. やや不満足	3	2.8	100.0
1. 不満足	0	0.0	100.0
合計	109	100.0	100.0

表17 「オリンピックムーブメント」に関する理解度

	n	%	累積%
4. 理解している	18	17.5	17.5
3. やや理解	35	34.0	51.5
2. どちらでもない	17	16.5	68.0
1. 理解していない	33	32.0	100.0
合計	103	100.0	100.0

と、第2部イベントのプログラムに対しても、多くの参加者が高い満足を得ていたことがうかがえる。

現在の日本のスポーツ界についての意見を自由記述でたずねたところ、73名(64.0%)から回答があった。スポーツの盛り上がりや、競技力の向上などがうまくいっているという状況に対するポジティブな評価が20件と最も多くみられた。一方、スポーツによって認知度や報酬、エンターテインメント性に格差があるという記述(15件)も多くみられ、また解決すべき重要な問題として体罰をあげた記述(5件)も散見された。その他、2020年の東京オリンピックによってスポーツが盛り上がることを期待するという記述も7件みられた。

次に2020年の東京オリンピック開催の意味についての意見を自由記述でたずねたところ、79名(69.3%)から回答があった。スポーツの価値

の高まり、子どものスポーツ参加の促進、競技力向上というスポーツへの良い影響（41件）から、経済的発展、復興の促進など、二次的な波及効果に関する記述（50件）がみられ、回答者のほとんどが大きな期待を抱いていることが窺えた。ネガティブな意見は1件のみみられたが、オリンピック後の反動について心配するものであった。

最後に、オリンピック・ムーブメントの理解度について報告する。『『オリンピック・ムーブメント』という用語や意味についてご存知でしたか?』という質問を行った結果、「理解している」が18名（17.5%）、「やや理解」が35名（34.0%）、「どちらでもない」が17名（16.5%）、「理解していない」が33名（32.0%）であった（表17）。約半数の参加者が、オリンピック・ムーブメントという用語や意味に関して理解していることがうかがえた。しかしながら、「理解していない」とする回答が32.0%と、かなりの割合を占めていることから、オリンピック・ムーブメントの用語や意味について理解度を高められるような活動や情報発信を、今後も本学から行っていくことが必要であるといえる。

V まとめにかえて

クーベルタン男爵の、青少年教育のためにスポーツが重要であるという考えに基づき始まった近代オリンピック。それから100年以上が経ち、今日では、多くの人々に感動や夢を与えるだけではなく、国境や人種を超えて、人としての尊厳を相互に認め合える機会にもなっている。そのような意味においても、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピック競技大会が、スポーツを通して人類の繁栄や世界平和がもたらされることを象徴する大会になるであろうことが予感される。

また、周知のように、学習指導要領の改訂に伴って、中学校、高等学校保健体育の体育理論においても「文化としてのスポーツ」の意義やオリ

ンピック・ムーブメントについて学ぶことが盛り込まれるなど、オリンピックやスポーツの文化的、社会的価値が重視されている。

これらの社会的ニーズや教育的動向を背景に、オリンピック・ムーブメントの浸透、スポーツに関連する社会的問題やスポーツの文化的価値について考える場と情報を提供することは、体育・スポーツの教育と研究を専門とする鹿屋体育大学が果たすべき役割の一つと位置づけられる。また、そのような本学が行う教育と研究の成果は、クーベルタンをはじめこれまでの国内外の体育・スポーツ家が提唱してきた「スポーツ教育」の理想を具現化するものでもあるといえるのではないだろうか。

今回のイベントを、鹿屋体育大学発オリンピック・ムーブメントのキックオフ・イベントとして位置づけ、今後も継続して、鹿屋体育大学からのオリンピック・ムーブメントを推進していきたいと考えている。

【謝辞】

本事業のイベントを開催するにあたり、NPO 法人日本オリンピック・アカデミー、鹿児島県、鹿児島県教育委員会、鹿屋市、鹿屋市教育委員会、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム、(財)鹿屋体育大学体育・スポーツ振興教育財団、NPO 法人NIFS スポーツクラブ各位からご後援を賜りました。また、学内の関係部署の教職員・学生の活躍のもとに、無事本事業を遂行することができました。

関係各位には、特に記して謝意を表します。

【引用文献】

南日本新聞、2014年1月25日付朝刊、The Campus Press のページ。

Minetti, A.E. and Ardigó, L.P. Halteres used in ancient Olympic long jump. NATURE. VOL 420: 141-142, 2002. (本文中の資料2における図1および図2は、<http://www.nature.com/nature/journal/v420/>

n6912/fig_tab/420141a_ft.html より引用. 参照日
2013年8月19日)